

2.1.2.冠婚葬祭マナー本に描かれた建墓と墓参りの作法

問芝 志保

1. はじめに

昨年度の報告書では、いわゆるスピリチュアル系の書籍（以下「スピリチュアル本」）における、墓参りを推奨する記述を対象として分析を行った。その結果スピリチュアル本では墓参りの意義を、従来いわれているような先祖への感謝・報恩、あるいは自己確認といった面を追認するのみならず、「墓参りで開運する」「先祖の加護を得る」といった現世利益的な側面から補強するかたちで記述をしていることが明らかとなった。もちろん、先祖の加護や功德を願うこと自体は、スピリチュアル本に限らず従来の先祖観のなかにも含まれる。ただし現代のスピリチュアル本では「家」的な要素が弱まり、「私」の「幸せ」や「パワー」、「金運」、「浄化」等の利益が前面化している点に特徴があった。また、現代社会で多様な葬送が普及するなかで、人々は改めて墓参りの意味や意義を模索しているとも考えられる。

以上をふまえ、本年度は「先祖祭祀・供養や墓参りはどうあるべきか」を説いた各種の作法書のなかでも、冠婚葬祭のマナーを説いた本（以下「冠婚葬祭マナー本」）を検討対象とする。

2. 対象と方法

（1）冠婚葬祭マナーとは何か

マナーに関する古典的な研究として、西欧社会におけるマナーの成立を論じたN・エリアスの『文明化の過程』がある。同書は、フランスの礼儀作法書の時代的变化を分析し、16世紀の宮廷社会が食事作法の洗練化を通じて他の階層と自らを差別化してきたことと、それが18世紀ごろには市民階層へ、さらに19世紀には植民地へも伝播したことを浮き彫りにした業績である（エリアス1978）。

近代日本のマナーについては熊倉功夫の先駆的な研究がある。熊倉は、戦前の礼法書は家のなかのマナーを中心としていたのに対し、戦後の礼法書ではそれが極端に少なくなり、たとえばビジネスマナー本にみられるように、マナーが家庭の外へと出ていったと述べた（熊倉1999：233）。

熊倉の「家の内部」「家の外部」の大きな枠組みを受けながらも、より細かな議論が展開されつつある。マナーについての社会学的研究を立ち上げた加野芳正らによれば、江戸時代の武士や町人にとって礼儀作法の遵守は重要で、マニュアル本はベストセラーだったという。しかし明治になると坐礼ではなく西洋式立礼のマナーが輸入され、さらに明治末以降には西洋式を受け入れつつも日本的な「国民礼法」が形成されて、学校教育で教えら

れた（加野2014a：28、矢野2014：i）。さらに、近代における図書館マナーの形成を論じた呑海沙織は、図書館という近代的施設での礼法が『礼法教育』に記載され、それを踏襲した礼法書が多数刊行されたことと、および学校教育とによって、図書館のマナーが全国化・標準化したことを明らかにしている（呑海2011：86）。

以上を整理すれば、礼儀作法＝礼法とは、確かに家内の秩序という側面では、礼法書も参考にしながら家内で考案され、そして世代的に継承されるものだったといえる。一方、家の外での礼法、特に近代以降に形成された新しいマナーは、教育やメディアをとおして普及したのである。

葬儀も、かつて家や地域共同体が主体となって運営されていた時代には、その家や地域固有の規範の遵守こそが求められたと考えられよう。しかし戦後になると、家や地域共同体の実態が弱まり、葬儀の担い手が葬儀社へ移行したことで、遺族・参列者とも葬儀社の提供するサービスの受け手として参与するようになった。さらに人々の流動性が高まり、全国各地から人が集住する都市では、普遍的に通用するマナーが求められた。こうして、香典や喪服などの作法は、葬儀に参列する際に恥をかかないための重大問題として、マナー教室やマナー本などのメディアをとおして学ばれるものとなったといえる。この点について、具体的な実証作業を行ったのが、山田慎也による論考である。山田は、近代以降の作法書にみられる告別式の記述の変遷をたどることで、作法書が「支配的言説」となっており、東京で成立した告別式が「正当な方式」として地方に浸透した結果、告別式の全国的な均質化がもたらされたことを明らかにしている（山田2017）。

さらに今日の日本社会においては、守るべきマナーの範囲が拡大していることが指摘できよう。加野芳正は、マナーの拡大の背景の原因は、マナーの悪化ではなくむしろ人々がマナーに過敏になっていることにみるべきと述べる。加藤は人々が過敏になった理由として①社会や対人関係が複雑化し、コミュニケーション能力が求められるため、②人々の自尊心の肥大と市場化により、消費者を不快にさせないことが重視されるため、③たとえばタバコの臭いのように、人々が不快を感じる範囲・領域がかつてよりも拡大しているため、の3つを挙げている（加野2014b：61）。

これをマナー本の消費者の立場におきかえれば、社会のなかで拡大し増加するマナーに対し、人々は随時新たに学ぶ必要があるということであり、さらには新しいマナーという規範からの逸脱、それによる批判的まなざしを恐れ、不安を感じるようになるということである。そうした消費者の不安が、今日における冠婚葬祭マナー本や、インターネットでの情報を増加させているといえる。そしてマナー情報の氾濫はまた、守るべきマナーの数を増やし、規範性を高め、いっそう人々の不安を喚起することになるのである。

（2）本稿の対象と方法

かくして、日本ではこれまで多くの冠婚葬祭マナー本が刊行されてきた。本稿では、同一の監修者が刊行した冠婚葬祭マナー本を対象とし、年代を経るごとに墓をめぐる記述がどのように変化しているかを明らかにする。

複数ではなく一人の監修者を取り上げるのは、その変遷をより明確にするためである。具体的には、岩下^{いわしたのりこ}宣子という人物が監修し、1999年～2023年までに刊行された冠婚葬祭マナー本19冊を分析の対象とする。

岩下のプロフィールを各書籍の奥付の記載内容からまとめると、次のとおりである。1945年東京生まれ、共立女子短期大学卒業後、キッコーマン株式会社に入社。30歳のとき、全日本作法会の内田宗輝、小笠原流^{こがさわなが}小笠原清信のもとでマナーを学ぶ。1985年、現代礼法研究所を設立（主宰を経て現在は代表）。以降、「マナーデザイナー」の肩書で企業研修やマナー講座の講師を務め、また講演活動、TV出演などを行うようになる。2004年には、NPOマナー教育サポート協会を設立（理事長を経て現在は相談役）。2008年からは、財団法人日本電信電話ユーザ協会「もしもし検定」専門委員を務めた。

岩下が著者・編者や監修者をつとめた書籍は数多く、50冊をゆうに超える。書籍のテーマは冠婚葬祭の他、人付き合い・贈答の作法、接客・ビジネスマナー、子供へのマナー教育、敬語、手紙・スピーチ文の書き方、“女性の美しいしぐさ”などがある。本稿はそのなかでも、冠婚葬祭を表題に掲げたもののみを対象とする。本稿が分析の対象とした冠婚葬祭マナー本は次ページ表1のとおりである。

ところで、監修者である岩下の意向が、これらの冠婚葬祭マナー本の記載内容にどこまで反映されているかは必ずしも定かではない。上掲した書籍の奥付にはいずれも、取材・執筆・編集担当者などとして複数名の名前が挙げられている。実際の執筆はこれらのライターや編集者たちが、岩下のものを含む既存の冠婚葬祭マナー本等を参考にしつつ行なったものと思われる。後述するように、書籍によっては一部細かな記述内容に相違点があることから、細かい内容まで岩下が確認しているわけではないようである。

とはいえ、そうした点は、本稿にとって大きな問題ではない。それは本稿の目的が、これらのマナー本の記述を著者の思想や観念等としてとらえるのではなく、「人々が求める記述」すなわち「墓をめぐる社会規範」を一定程度反映したものとしてとらえることにあるためである。マナー本が書籍市場のなかで販売部数を競うように刊行されている以上、その記述内容は単に一方的に自説を述べるのではなく、むしろ時流をとらえつつ人々のニーズに応じるものとなっていると考えられる。

1 小笠原流とは室町時代の公家の有職故実の系譜をひく礼法で、江戸時代には武士の作法として定着、明治には学校教育にも取り入れられ、特に女子の礼法として広く用いられたという（加野2014b：28）。

岩下宣子1999a『困ったときに役立つ 慶弔事典』日本文芸社
 おつきあい上手な若奥サマの集い(編)・岩下宣子(監修) 1999b『ズボラな奥さんの花マル冠婚葬祭ガイド 一家に一冊!』情報センター出版局
 岩下宣子(監修)2001a『冠婚葬祭 恥をかかないマナー事典』日本文芸社
 岩下宣子(監修)2001b『カラー版 冠婚葬祭事典 結婚・葬儀・お祝い・年中行事・おつき合いとマナーのすべてがわかる』ナツメ社
 岩下宣子(監修)2007『いざという時慌てない 葬儀弔事の作法』樫出版社
 岩下宣子(監修)2008a『イラストでわかりやすい 冠婚葬祭のしきたり・マナー事典』ナツメ社
 岩下宣子(監修)2008b『知りたいことがすぐわかる! 冠婚葬祭「こんなとき、どうする?」便利帳』大和出版
 岩下宣子(監修)2009『冠婚葬祭マナーの便利帖 作法が身につく しきたりがわかる』高橋書店
 岩下宣子・近藤珠實・篠田弥寿子(監修)2011『くらしの冠婚葬祭とマナー』新日本法規出版
 岩下宣子(監修)2013a『冠婚葬祭しきたりとマナー事典 心が伝わる「きちんとマナー」がよくわかる』主婦の友社
 岩下宣子(監修)2013b『冠婚葬祭しきたりとマナーの事典 お付き合いの基本ルールがひと目でわかる!』日本文芸社
 岩下宣子(監修)2014『冠婚葬祭マナーオールガイド こんなときどうする?がきちんとわかる』新星出版社
 岩下宣子(監修)2015『冠婚葬祭「きちんとマナー」ハンドブック いつでもどこでも知りたいことのすべてがすぐわかる』主婦の友社
 岩下宣子(監修)2016a『きちんと知っておきたい 大人の冠婚葬祭マナー新事典』朝日新聞出版
 岩下宣子(監修)2016b『50代からの冠婚葬祭きちんとマナー 慶弔のお金、しきたり、お見舞い、お礼のマナーなど(ゆうゆうLife特別編集)』主婦の友社
 岩下宣子(監修)2020『冠婚葬祭マナーの新常識 何が変わったの? withコロナ時代に対応!』主婦の友社
 岩下宣子(監修)2022『礼儀正しい人のための 冠婚葬祭「マナーとお金」最新ハンドブック』主婦の友社
 岩下宣子(監修)2023a『増補改訂版 きちんと知っておきたい 大人の冠婚葬祭マナー新事典』朝日新聞出版
 岩下宣子(監修)2023b『冠婚葬祭・年中行事のマナー大全』成美堂出版

表1 本稿が対象とした書籍
 (以下、本文中では、それぞれの書籍名を略し、刊行年によって示す)

もとより著者の岩下自身も、上掲書籍2023bの「まえがき」で、マナーは時代とともに変わると述べつつ、人の気持ちに配慮した「思いやり」として「先人たちが作ってくれた、いろいろな思いを持った多くの人が集まる冠婚葬祭の場でのマナーとルール」(p.3)を学ぶことを推奨している。このことから明らかなように、岩下が冠婚葬祭マナー本で説くマナーは、保守的であり、日本社会の現時点における規範を表しているとみなしてよいだろう。そこでこの記載内容が年代によっていかに変化しているかを明らかにすることは、日本社会の規範を明らかにすることにつながる。

なお、上掲の冠婚葬祭マナー本の読者層は、装丁やイラスト、記載内容からして、女性向けを想定しているとみなしうることを付言しておく。

3. 冠婚葬祭マナー本の分析

対象となる冠婚葬祭マナー本の内容を確認し、①～⑫までの内容の記載があるかどうかを一覧にしたのが次ページの表2である。2007(全144頁)、2008b(全190頁)、2016b(全82頁)はページ数の少ない本やムックで、葬儀や法要のマナーのみが書かれ、墓についての記載はほぼないため、表2の対象から除外した。このことから冠婚葬祭マナー本としては、墓の優先度は高くないことがわかる。

以下、それぞれの記載内容とその変化を記す。

①建墓

墓を建てるための基礎的な知識を内容とする。墓地の選び方のポイントとして、公営霊園・民営霊園・寺院墓地の別やそれぞれの特徴を挙げたり、また墓石購入のための情報として、一般的な家墓の構成、仏式・神式・キリスト教式の墓の特徴、費用の目安などが記されたりしている。埋葬許可証や永代使用权の名義変更等の手続き、祭祀財産といった基礎用語も解説される。墓が完成した際には僧侶を招き開眼式(御魂入れ、入魂式)を行うことが書かれているものが多い。

最初期の1999aには「墓地の入手が困難な現代では、個人墓を建てずに、「〇〇家代々之墓という家単位の合祀墓に埋葬し、供養するのが一般的です」(p.258)とある。あえてこのように書かれていることは、まだ全国的に見れば個人墓から家墓への移行が未了であることを表すであろう。

なお、比較的初期の2001bや2008aは納骨の一連の方法に関する記載のみで、新しく墓を建てる場合については記載がない。

	①建墓	②多様な墓	③納骨	④仮納骨	⑤分骨	⑥改葬	⑦墓じまい	行	⑧墓参り代	参り	⑨彼岸の墓	り	⑩盆の墓参	作法	⑪墓参りの	墓の選択	⑫生前準備・終活での
1999a 全192頁	◎	○	○	○	○	○	—	—	—	○	春秋	○	○	○イ	—	—	—
1999b 全192頁	◎	○	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—	—	—	—
2001a 全304頁	◎	○	◎	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	◎イ	—	—	—
2001b 全432頁	—	—	◎	○	○	—	—	—	—	○	春	×※	○	○イ	—	—	—
2008a 全256頁	—	△散骨のみ	○	○	○	—	—	—	—	○	春	—	—	○イ	—	—	—
2009 全432頁	◎	◎	◎	○	○	—	—	—	—	○	春秋	—	—	○	—	○※「自分の葬式・告別式」	—
2011 全366頁	◎	◎	◎	○	○	—	—	△	—	◎	春	—	—	○イ	—	○※エンディングノートの内容として	—
2013a 全432頁	◎	◎	◎	○	○	—	—	—	—	◎	春秋	○	○	◎イ	—	—	—
2013b 全384頁	◎	◎	◎	—	○	○	—	—	—	◎	春	○	○	○イ	—	—	—
2014 全288頁	◎	—	◎	—	○	○	—	—	—	○	春秋	○	○	○	—	—	—
2015 全240頁	◎	△散骨のみ	◎	—	○	—	—	—	—	—	—	○	○	○イ	—	—	—
2016a 全464頁	◎	◎	◎	—	○	○	—	—	—	○	春秋	○	○	◎イ	—	◎「終活」	—
2020 全208頁	◎	◎	◎	—	○	—	—	○	—	○	春秋	◎	◎	◎イ	—	—	—
2022 全240頁	◎	○	◎	—	○	○	○	—	—	△	春秋	○	○	◎イ	—	—	—
2023a 全480頁	◎	◎	◎	—	○	○	—	○	—	○	春秋	○	○	◎イ	—	◎「終活」	—
2023b 全320頁	◎	◎	◎	—	○	○	◎	○	—	○	春秋	—	—	◎イ	—	—	—

表2 冠婚葬祭マナー本における墓の記述

◎：1ページ以上記載あり ○：記載あり △：少量記載あり —：記載なし
「⑪墓参りの作法」列 イ：イラスト（図解）入り

②多様な墓

最も古い時期の1999bですでに、「個別の納骨スペースを持たず、みんながいっしょに入る合葬式のお墓や、ロッカー型のお墓、納骨堂なら、かなりリーズナブルな価格。……最近では「遺灰を思い出の場所へ返してやりたい」と海や山へ散骨（自然葬）したり、ユニークなカタチをした墓石を建てたりと、葬送のしかたもずいぶん自由になってきた」（p.181）と、現代的な墓の多様化への言及がある。以降、本によって差はあるものの、ほとんどが、ライフスタイルや意識の多様化により、永代供養墓、樹木葬、宇宙葬、ペットと一緒に入れる墓など、新しい埋葬のスタイルが出ていることを紹介したうえで、①情報を集めて比較検討すること、②実際の見学をすること、③条件を細かく確認すること、④家族に相談・了解をとること、といった注意を促す記載となっている。特に散骨については法律・条例や、遺骨を細かく砕くというマナーを遵守すべきことを明記するものがある（2009のp.366、2020のp.182など）。

2022では「新しく墓を建てる／墓を移す／墓じまいをする」項で「これまでの墓を敬う気持ちは保ちながらも、自分たち世代や子孫の利便性も考えて、お墓の形を考えなくてはならない時代となっているのです」（p.218）と、墓を敬うべきとの規範は述べられつつ、子孫の利便性を考えるべきとの新しい規範とともに、多様な墓が紹介されている。

③納骨・④仮納骨

納骨の時期と、石材店への手配などの一連の手続き、納骨式などが説明される。このうち特に仮納骨をめぐる記載は、2013年頃を境になされないようになっていく。

まず1999a「納骨の時期と行い方」では、「遅くとも1年以内にはすませます」とし、一般には四十九日で、初七日や火葬直後の場合もあるとしている。そして、新しく墓を造る場合などで1年以上埋葬できなければ、霊園や寺院、納骨堂に「仮納骨」を行い、一周忌や三回忌に合わせて墓を建てて納骨するとある（p.229）。2001b「納骨の行い方」項でも、「遺骨は1年以上自宅に置かないようにします」（p.220）と記し、規範があらわれている。このように当初は、遺骨は早く墓に埋葬すべきことが規範的に要請されている。

それが、2013a「菩提寺や霊園の納骨堂に仮納骨をします」項では、「なお、自宅に遺骨を置くことも違法ではありません」（p.384）と少しゆるやかな表現へと変化し、それ以降、仮納骨に関する記載はされなくなる。2020「納骨」項をみると「墓がない場合は、一周忌を目安に墓を用意して納骨します。遅くとも三回忌までには納骨をすませましょう。墓が完成するまでは、自宅に遺骨を安置しておいてかまいません」（p.178）とあり、早めの納骨を勧めてはいるものの、仮納骨に関しては全く紹介されていない。この10数年で、自宅に遺骨を安置することへの忌避感が弱まり、しかるべき場所に安置すべきとの規範が弱まったことがわかる。

なお、1999aのみが、遺骨を電車で運ぶ際の運び方をイラスト入りで丁寧に紹介している。「ふたり以上で出かけ、遺骨は両手でしっかりとささげ持ちます。座るときは、ひざの上にのせておきます。電車の網棚や座席の上に置くようなことをしてはいけません。席

を離れる場合は、必ず同行者に渡します。遺骨を運ぶ場合は喪服を着用するのが通例ですが、現地で喪服に着替えても差し支えありません」(p.230)。

⑤分骨・⑥改葬・⑦墓じまい・⑧墓参り代行

分骨については初期から最新のものまで、ほぼ全ての本に記載がある。一方改葬も1999aからあるが、「できるだけ移したくないものですが、改葬せざるをえない場合は……」として、手続きをとる手順を記している。さらに「お世話になった菩提寺には、お礼の意を込めて「志」を包むようにしたいものです」(p.272)と、ハードルの高さが示されている。「墓じまい」との言葉の初出は2022だが、2023bでは早くも丸1ページを割いて解説されており、ニーズの高さをうかがわせる。墓参り代行については2011から簡単な紹介があり、2020以降になるとその取り上げ方がやや大きくなっている。

⑨彼岸の墓参り・⑩盆の墓参り

年中行事や歳時記と題した章で、彼岸と盆について記載されているが、そのなかで墓参りの記載があるものは表2のとおりであった。この彼岸と盆の墓参りの解説は年によって書き方に相違があり、一考を要する。

まず2001b「春のお彼岸」項では「お盆とは、家に帰ってくる先祖をお迎えする行事で、お彼岸は先祖に会いに行く行事とされています。ですから、お墓参りはお彼岸には欠かせないものです」(p.357)とある。盆には墓参りに行かない、と明記されていないものの、文意としてそう読み取ることも可能であろう。実際、2011までは、彼岸の項目に墓参りの記載があるのに対し、盆の項目では盆棚がイラスト入りで詳述されるのみで墓の記載はない。

それが2013を境に、盆にも墓参りに行くことが書かれるようになる。ただし彼岸が重視されていることは疑いなく、たとえば2013b「お彼岸」項では「この期間は、あの世とこの世が最も近づく時期とされています。そのためにも、必ず先祖のお墓参りにいき、先祖の霊を供養します」(p.193、「そのためにも」の文意がやや不明確だが、本文ママである)とあるのに対し、「迎え火」項では「先祖の霊は、迎え盆である13日の夕刻に帰ってくるといわれています。そのため、お墓参りはできるだけ13日の昼までに済ませるのが理想です」(p.202)と書かれている。2016a「秋のお彼岸」項でも「お墓や仏壇には、花やおはぎ、彼岸だんごなどを供えます。お墓参りには、なるべく家族そろって出かけ、墓前で手を合わせて、近況報告や見守ってくれていることへの感謝を、心を込めて伝えましょう」(p.63)としており、彼岸が重んじられている。

2022になると、彼岸の項目は小さくなり、墓参りの記載が無くなる。むしろ盆の項目で、盆の入りに墓参りを行うことが記載されている。さらに「仏式では春と秋のお彼岸(先祖と交流できるとされる時期)・お盆(死者が年に一度帰ってくるとされる時期)・故人の命日・年末にするのが一般的です。都合がつかない場合は早めにお参りをしましょう」(p.184)と、彼岸・盆・命日・年末が併記されている。

以上のように、対象とした冠婚葬祭マナー本では、初期の段階では彼岸に墓参りすべきとの規範があったが、しだいにそれが盆へと移行しているとみることができる。

⑪墓参りの作法

墓参りを実際にどのような手順で行うべきかについては、初期からイラスト図解入りで記載があるものもあるが、2016以降はより詳しく、ページを割いて行われるようになっていく。このさらに詳しい内容は次の表3のとおりである。

	墓を洗う	墓石の水気を拭く	雑草をとる	供水	供花	供物	ろうそく	線香	水手向け	順に参る 故人と血縁に近い	低い姿勢で	合掌	供物を持ち帰る
1999a	○	—	—	—	○	○	—	○	○	—	—	○	○
1999b	○	—	—	—	○	○	○	○	○	—	—	○	—
2001a	○	—	—	○	○	○	—	○	○	○	○	○	—
2001b	○	—	○	—	○	○	—	○	○	○	×	○	—
2008a	○	—	○	—	○	○	—	○	○	—	○	○	○
2009	○	—	○	—	○	○	—	○	○	○	×	—	○
2011	○	—	○	—	○	—	○	○	○	○	×	○	—
2013a	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
2013b	○	—	○	—	○	—	—	○	○	○	○	○	—
2014	—	—	○	—	○	—	—	—	○	—	—	—	—
2015	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—
2016a	○	○	○	—	○	○	—	○	○	—	○	○	○
2020	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2022	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2023a	○	○	○	—	○	○	—	○	○	—	○	○	○
2023b	○	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

表3 冠婚葬祭マナー本における墓参りの作法の詳細
○：記載あり ×：反する記載あり —：記載なし

経年変化を認めるとすれば、墓を洗った後に「墓石の水気を拭く」こと、「低い姿勢で」参るべきこと、そして「供物を持ち帰る」べきことが、比較的新しい規範として前景化してきている点であろう。

「墓石の水気を拭く」ことは、概ね2013頃から規範化したとみてよい。

「低い姿勢で」参るべきかどうかの記述には一貫性を欠く。たとえば2001aからすでに、墓よりも低い姿勢で参るべきことが書かれ、全体として「○」を記した本は全て低い姿勢もしくはしゃがんで、と記載がある。一方2001bでは墓参りのイラストが立礼である

(p.374)。2009では「しゃがんで拝むとていねいですが、立礼でもOK」(p.219)とあり、2011の墓参りイラストも立礼である(p.157)。2023 b「墓参りの手順」項には「墓参りに特別な作法はありません。きれいに掃除をして、お供えをし、しゃがんで手を合わせ、心を込めて祈ればOK」(p.184)と、やさしい記載になっている。

「供物を持ち帰る」記述も、2008a・2009に記載があるものの、いったん見られなくなった後、2016a以降は必ず書かれるようになっていく。近年では多くの墓地で、鳥や動物、虫が集まることを嫌い、供物は持ち帰るべきことが規範化されつつあることの反映であろう。

なお2011「墓石に水を掛けるのは、故人の喉を潤し、罪を浄化するためといわれます」(p.157)などと、儀礼の意味が付されているものもある。

⑫生前準備・終活での墓の選択

冠婚葬祭マナー本は基本的に、自家で葬儀を出す場合や、葬儀に参列する場合のマナーを説くものである。しかし、自らの最期のあり方を考え、エンディングノートの書き方、財産分与、葬儀・墓、尊厳死・臓器提供の意思表示などをしておくべきことが、2009「自分の葬式・告別式」からすでに謳われている。

たとえば2016a「自分の最期について考えよう」項は「自分らしい幕引きができるように、まだ元気なうちから準備をはじめるとよいでしょう」としたうえで、「葬式の形式や墓への入り方を決めておきましょう。生前予約や、子孫に負担をかけない永代供養も増えています」、「数々の難題に対して、当事者の意志をはっきり明示しておきましょう」(p.226)と勧めている。2016a・2023a(2016aの増補改訂版)は「終活」の語も使用し、6ページを割いて詳しい内容を記している。「子孫に負担をかけない」ことを「マナー」とみなす、現代的動向をみてとることができる。

項目ごとの分析は以上である。最後に、冠婚葬祭マナー本における墓観、墓参り観、死者観、先祖観について、昨年度対象としたスピリチュアル本と比較しながら述べたい。

スピリチュアル本では、墓とは何か、供養とは何か、なぜそうすべきかといったことが、必ず述べられていた。それに対し冠婚葬祭マナー本は、それらを改めて説明することなしに、具体的にどのようにすべきかのみを詳しく述べていることを特徴とする。墓や供養それ自体の重要性は自明視されており、特段の説明を必要としないのである。

ただし、墓や供養の意義の説明が全く皆無というわけではない。2016a「墓地とお墓の種類」項では「お墓は死者が安らかに眠り、遺族が語りかける場所。財産でもあるので大切にしていましょ」(p.324)とあり、大切にすべきとの規範がみてとれることは特筆される。また先祖についても、2001「ご先祖さまを知っていますか」項で、「現代ではそうした先祖の霊をおろそかにし、かえりみることがほとんどありません。自分の先祖を5代さかのぼって知っている人は、かなり少ないでしょう。もっと先祖を大切にするためにも、自らのルーツや家系を探究してみてもいいでしょう」(p.224)とある。しかしなが

ら、このような先祖規範や墓規範は、これ以外にはほとんどみられない。

ところが葬儀や仏壇、位牌等の項目をみると、供養に対する規範的言説が数多くみられる。たとえば2009では仏式・神式・キリスト教式の「供養のしかた」として、仏壇・位牌・祖霊舎・神棚・霊璽・祭壇等の参り方が図解入りで詳しく紹介され (pp.374-377)、さらに「事情により仏壇が購入できない場合も、遺影と位牌に手を合わせるだけで供養になります」と書かれている。2011「仏壇・神棚の祀り方」項では、「毎日1回、静かな気持ちで先祖と向き合う時間を持ち、感謝の気持ちを伝えましょう」(p.232)、2013b「命日」項では「祥月命日には位牌や仏壇の手入れをし、お墓参りをして故人の供養をします」、「お墓参りは故人を偲ぶものなので、いつ行ってもよいのですが「命日」以外にも、お彼岸やお盆、法要などにはできるだけ行くようにします」(p.345)、2022「仏壇を購入する・お参りする」項では「仏壇がない家では、四十九日法要までに用意しましょう」(p.220)とあり、さらに最新の2023b「日常の供養」項でも「(筆者注：仏壇に)朝、身支度を整えたら朝食前にまずお参りをしましょう」(p.186)などがあり、仏壇の購入と毎朝のお参りが強く推奨されている。どういうわけか、墓と比べて、仏壇や位牌をまつる規範は強く表れているといえる。

さらに、直葬や葬儀なしとの選択肢の存在は、ほとんどの本では紹介すらされていない点も指摘できる。2013aでは「直葬」という形の見送り」項で言及しつつも、「ただ、葬儀は残された人たちが大事な人の死を受け入れるための最初のプロセスでもあります。十分な別れの時間を持つことも必要でしょう」(p.349)として、グリーンケア的観点から直葬は推奨しないとの立場がみえる。

4. まとめ

本稿は冠婚葬祭マナー本を読者のニーズに応じたもの、そして現代日本社会の規範を反映したものとみなして考察した。

全体として、冠婚葬祭マナー本の出版年代が新しくなるにつれ、墓参りの規範についての記述が増える傾向が指摘できる。それは、現代社会におけるマナーの範囲の拡大を表している。

具体的な記載内容は、必ずしも大きな変化とは言えないものの、確かにいくつかの経年変化が認められた。まず墓の多様化は、ライフスタイルの多様化と利便性の面から、肯定的に詳しく紹介されるようになってきている。また、早く納骨すべきとの規範が弱まり、それぞれの事情や心情にそくして実施することが許容されるようになってきている。また墓参りすべき時期としては、彼岸から盆へと比重が移っていること、墓参りの作法がより詳しく、細かくなり、「墓石の水気を拭く」こと、「低い姿勢で」参るべきこと、そして「供物を持ち帰る」ことの規範が高まっていることが傾向として指摘できる。

そして、子孫の利便性を考えて負担をかけないようにすべきことが、ここ数年の新しい

マナーとして加わっていることも見いだされた。岩下の提唱するマナーとは人への配慮や思いやりであるため、その観点からいえば、子孫への思いやりとしての終活がマナーに含まれることとなるのであろう。本稿冒頭で見たように、近代～戦前の礼法は家の内部を、戦後のマナーは家の外部を対象としてきた。今日において終活が子孫への思いやりとして「マナー化」しているとすれば、それは子孫が家の外部の存在となったこと、いわば他者となったことを表しているとも考えられる。

葬儀・供養に関する規範は今日においても依然として強いことがうかがわれる。先述したように、日本社会でのマナーはますます増加する状況のなかで、人々は自家流・自己流ではない、標準的な、正しい、葬儀・供養の方法を求めているといえる。この点に関しては来年以降改めて検討したい。

昨年度の報告書でも述べたように、日本の先祖・墓・墓参りをめぐる言説は、もとより伝統宗教教団の専有物ではなく、近代以降から戦後にかけての法制度や教育制度、マスメディア、消費市場、学界、文学作品等々も含めた広大な言説空間のなかで多様なアクターにより語られながら、変容し続けながら、形作られてきた国民的習俗として位置づけられる。本年度はそのなかでも冠婚葬祭マナー本を対象とし、以上のような、現代日本社会における墓の規範を明らかとした。

参考文献

- N・エリアス、赤井慧爾ほか訳1978（1969）『文明化の過程』上下、法政大学出版局
- 加野芳正2014a「〈マナーと作法〉の社会学に向けて」加野芳正編著『マナーと作法の社会学』東信堂
- 加野芳正2014b「現代社会におけるマナーの諸相」加野芳正編著『マナーと作法の社会学』東信堂
- 熊倉功夫1999『文化としてのマナー』岩波書店
- 呑海沙織2011「近代礼法書にみる図書館のマナー」『図書館情報メディア研究』9
- 矢野智司2014「まえがき」矢野智司編著『マナーと作法の人間学』東信堂
- 山田慎也2017「告別式の平準化と作法書」『国立歴史民俗博物館研究報告』205